

V

KOBE COLLEGE
NEWSLETTER

Vistas

“Beauty Becomes a College”



40

2021・November
Published by KOBE COLLEGE
神戸女学院大学



Vistas

40

Vol.



STUDENT'S VOICE

2歳のときから姉について音楽教室に通っていました。エレクトーンでいろんな音を出してみたり、タンバリンや太鼓を叩いたり、「音楽遊び」をする感覚で楽しんでたのを覚えています。4歳頃からピアノの個人レッスンを受けるようになり、それからずっとピアノ一筋できました。

神戸女学院大学に入学してからは音楽に触れる時間が圧倒的に増え、毎日とても充実しています。音楽学部はとくに人数が少ないため、レッスンも濃密。ピアノ以外のことも広く学ぶなかで、音楽の先生になるという夢も見つかりました。音楽の授業が苦手な生徒もいると思いますが、少しでも楽しんでもらえる授業ができるように、もっと音楽について学



ピアノを通して見つけた夢
音楽の力で心を動かしたい

●音楽学部 音楽学科 3年生

び、自分の引き出しを増やしておきたいと考えています。この2年間はコロナ色の世の中で、コンサートなどのイベントは「不要不急」とされ、小学生のときから出ているコンクールも中止になってしまいました。そうした動きに頷けるところはあります。確かに音楽には、目に見えて何かをする力はないかもしれませんが、でも、音楽を聞いて心を動かされる人はきっといるはずです。コロナ禍に限らず、多くの人が傷つく出来事はこれまでも起こってきました。たとえば東日本大震災が起こった日のことは、記憶に強く刻みつけられています。そんなときに誰かを「癒してあげる」つもりで演奏するのはおこがましいことですが、水が染み込むようにずっと受け入れてくれる人がひとりでもいればうれしいと思います。

STUDENT'S VOICE

小学校から高校までは勉強が嫌いだっただのですが、総合文化学科に入学してからは自分の関心に従って授業を受けることができるので、学ぶことが楽しくなりました。以前は聞き流すだけだったニュースも、メディア論の授業を受けたことで背景を考えながら見るようになり、大学生になって世界が広がったのを感じています。

今とくに興味をもっている分野は社会学・メディア。卒業論文の執筆に向けて、日韓関係の歴史について調べています。「Kpopが流行しているのに国同士の仲が悪いのはどうしてだろう」という身近な疑問が出発点でしたが、これまでの歴史を丁寧に辿っていくなかで、世界の見え方は視点



授業で広がった世界への視野
歴史から学び未来を紡ぐ

●文学部 総合文化学科 3年生

によって変わるということがわかってきました。メディアによって切り取られた情報をそのまま受け止めるのではなく、物事を俯瞰的に見られるようになってきた気がします。私たちの世代は子どもの頃からSNSが発達していて、誰もが社会について自分の意見を発信することができます。でも一部の情報だけを見て「真実」と決めつけ、喧伝してしまうことも起こり得るのではないのでしょうか。知ることで、ものの見え方は変わっていくと思います。歴史を学んでいて実感するのは、今の行動が確実に未来へつながっていくということ。日韓関係も、今の政府の対応が先々にまで影響するはず。韓国に限らず、ほかの国と関係を築いていくうえで、目先のことだけでなく未来を見据えて話し合うことが重要だと考えています。

STUDENT'S VOICE

幼い頃から、父の仕事の都合でいろいろな国に住んできました。実際に目にしたこと・体験したことから膨らんでいた、社会問題への関心。大学生になってからは、人種差別や貧困、男女格差、難民など、気になっていたテーマはすべて学んできました。教育の柱としてリベラルアーツを掲げている神戸女学院大学だからこそ、これだけ幅広い授業を受けることができたのだと思います。そのなかで、ジェンダー問題を突き詰めたと思うようになりました。

今はグローバルメディアのゼミに所属し、性的指向(セクシャルオリエンテーション)の問題と向き合っています。LGBTQの当事者は特別視されがちですが、好きな色や食べ



女学院で学んだ幅広い視点で
ジェンダー問題を突き詰めた

●文学部 英文学科 3年生

物が人それぞれであるように、性的指向も多様であっていいはず。異性愛者との境界を曖昧にして、当たり前存在として受け入れられる社会にしていきたいというのが私の願いです。今の日本には性的マイノリティであることを公開している国会議員がいまいませんし、同性婚も認められていません。少しずつ変化しているとは思いますが、ジェンダーに関する多くの問題を解決するには、まだまだ長い時間がかかるはず。だからこそ、私は研究で終わらせるのではなく、何か人に影響を与えられるようなことに取り組みたい。そこで、卒業制作として映像作品をつくるつもりです。私の強みは、声を大にして自分の意見を主張できること。神戸女学院大学で伸ばした英語力も駆使しながら、国内外へ発信していきたいと思っています。

Vistas 創刊20年の変遷 移り変わる時代と未来!

創刊時には生まれたばかりだった子どもたちが今は神戸女学院大学で豊かな人格を育みながら未来を動かす確かな力を身につけている

創刊20周年を記念して、「Vistas」とは同じ年の学生たちの自分史を語ってもらった。記憶に残っているニュースや学んだこと、これからの社会の行く末について……。生き生きと輝く若い力に満ちた話を受けて、中野敬一学長が未来を担っていく学生たちへメッセージを送る。



2011 2010 2009 2008 2007

Timeline of Vistas covers from 2007 to 2011. Each cover is accompanied by a list of key events and news items from that year.

2006 2005 2004 2003 2002

Timeline of Vistas covers from 2002 to 2006. Each cover is accompanied by a list of key events and news items from that year.



PRESIDENT'S VOICE



●学長
中野 敬一 — NAKANO Keichi

みなさんのお話を聞いて、それぞれが目的をもち、充実した学生生活を送ってくださっていることをとてもうれしく思っています。なかでもみなさんが意識してくれているリベラルアーツ教育は本学の教育の三本柱のひとつ。専門分野の学びを続けるときに異なる視点加わること、専門性をさらに高めることができることで、ひとつのことだけを学んでいくと、なかなか新しいアイデアが出てこなくなってくるのですが、まったく違う分野に触れると思わぬヒントを得られるもの。意外なところで共通点を発見するのも、リベラルアーツのおもしろいところです。

本学の多様な学びを通じて
自分のミッションを見つけてほしい

この20年間を振り返ると、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件のことがまず思い浮かびます。あのときから世界は大きく変わり、日本も国際社会のなかでどういった立ち位置をとるのかというのを問われるようになりました。これからのグローバル社会を生きていく学生のみなさんにも、日本という国がどうあってほしいかということをはっきりと考えていただきたいと思っています。また今は大きな時代の転換期にあり、価値観も多様化しています。さまざまな価値観に触れ、多くの視点をもつことはもちろん不可欠ですが、自分が本当に大切にしたいことは見失わないでください。そして多くの情報が錯綜するなかであつても考えることをやめず、その情報の真偽を正確に見極められる思考力と判断力を身につけてほしいと思います。

本学のミッションステートメントには「愛神愛隣」に基づくキリスト教の精神を分かち合い、時代の潮流に流されることなく置かれた場で利害を超え自らの役割を感知し、果たし、人にとって真に大切なものを見分ける共感性の高い人格への成長を目指します」とあります。皆さんの学びはこのミッション（使命）に通じているのです。本学で得た知識と経験を活かして活躍されることを願っています。

STUDENT'S VOICE

入学当初は生命科学に興味があったのですが、授業を受けているうちに環境分野を研究したいと考えるようになりました。きっかけは、川や海の生き物と水質との関係性について知ったこと。マイクロプラスチックの問題のように、私たちの日常が水質に大きな影響を与えていることを知り、行動が変わりました。今取り組んでいるのは、身近な薬である解熱鎮痛剤の成分を含む水で、メダカを飼育する実験。すでにメダカの下顎が欠損することが明らかになっており、その経過を観察しています。

これからの社会を考えると、環境問題は避けて通れません。たとえば化石燃料である石油と天然ガスは、このまま



命を支える食と
快適な環境の創造をめざして

●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生

使い続ければ50年後には枯渇するといわれています。ひとりひとりが環境について考えることで、住みやすい地球にしていけるのではないのでしょうか。また過去20年間のニュースを振り返ってみると、2014年のSTAP細胞論文や2018年の森友文書など、ねつ造や改ざんに関するものがいくつも目に入ってきて、残念な気持ちになりました。こういった問題も、今後はなくしていかなければならないと思います。自分の将来については、新型コロナウイルスの影響で買い占めが起こり、食べ物が手に入らない人々がいるというニュースを見て、食品業界への就職を考えるようになりました。困っている人に食を届けられる仕事をしたいと思っています。コロナ禍で生活は一変しましたが、悪いことだけでなく、私にとってのターニングポイントにもなりました。

STUDENT'S VOICE

対人関係や人の心に興味をもち、心理・行動科学科に進学しました。最初は心理テストのイメージが強かったのですが、学ぶほどに「ここまで深く人の心を追求する学問なんだ」と実感。実習を通して自分自身への理解も深まりました。

神戸女学院大学ではほとんどの授業が少人数で行われるため、グループワークでも必ず自分の役割があり、自主性や行動力が養われるのを感じています。リベラルアーツ教育によって、心理学以外の分野にも視野が広がりました。また高校までは共学で、男性が先頭に立つことが多かったのですが、大学に入学してからは自ら発言する機会が増えたような気がします。「地域創りリーダー養成プログラム」



人の心をもっと深く追求し
寄り添える人になりたい

●人間科学部 心理・行動科学科 3年生

ではサプリーダーを務めるなど、積極的にリーダーシップを発揮する機会にも恵まれ、先頭に立つからこそ学べることもあると知りました。

女性の生き方を考えるとき、私が思い出すのは2014年に史上最年少の17歳でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんのことです。私とあまり年が変わらないのに、女性教育の大切さについて言葉に魂をのせるように話す堂々とした姿に打たれ、鳥肌が立ったのを覚えています。私も「女性だから」といって可能性を狭めることなく、自分の意見をもって行動できる人になりたいです。

卒業論文では、生きやすい社会づくりや居場所がない人の問題について取り上げる予定。私自身も、社会も、人に寄り添えるものになっていけたらと考えています。

2021

2020

2019

2018

2017



- ◎ 天皇退位、2019年4月末に
- ◎ 衆院選で自民大勝、民進が分裂
- ◎ 森友・加計・日報、政権揺るがす
- ◎ 「共謀罪」法が成立
- ◎ 電通に有罪、働き方改革へ機運
- ◎ 北朝鮮、核・ミサイル開発加速
- ◎ 中国、習近平氏「二強」確立
- ◎ 韓国、文在寅政権安定
- ◎ レイジーア空港で金正男氏暗殺
- ◎ 国連、核禁止条約採択
- ◎ オムロン松本元死刑囚らの刑執行
- ◎ 日産ゴーン会長を逮捕
- ◎ 財務省が森友文書改ざん
- ◎ 安倍首相「2島先送還」かじ
- ◎ 陸自「アラク日報」見つかり公表
- ◎ 米国抜きTPP11が発効
- ◎ 米朝が史上初の首脳会談
- ◎ 米中貿易摩擦が激化
- ◎ 朝鮮半島非核化、南北首脳が合意
- ◎ 米国抜きTPP11が発効
- ◎ 令和へ代わり
- ◎ 消費税10%に、軽減税率導入
- ◎ 京ア二放火殺人30人死
- ◎ ラグビーW杯で別島熱狂
- ◎ 首里城火災、正殿など焼失
- ◎ 抗議デモで香港騒乱
- ◎ 米大統領、初の北朝鮮入り
- ◎ 笑顔の波野、メジャー制覇
- ◎ 英EU離脱で混迷、選挙で決着
- ◎ イチロー引退、国民栄誉賞は辞退
- ◎ 新型コロナ猛威、初の緊急事態宣言
- ◎ 東京五輪、1年延期
- ◎ 安倍首相が退陣、後任に菅氏
- ◎ 「鬼滅の刃」大ヒット
- ◎ 新型コロナでパンデミック宣言
- ◎ 米大統領選でバイデン氏勝利
- ◎ 香港統制強める中国
- ◎ 英国がEU離脱
- ◎ 強まるGAF A規制論
- ◎ 民間初の有人宇宙船、ISSに
- ◎ 新型コロナワクチン接種始まる
- ◎ 原発処理水、海洋放出を決定
- ◎ 建設石綿訴訟判決・最高裁
- ◎ 東京五輪開催も責任持任任相次ぐ
- ◎ 菅内閣が総辞職、岸田内閣発足
- ◎ スエズ運河でコテナ船座礁
- ◎ ミャンマーでクーデター、国軍が掌握、弾圧死者500人超
- ◎ アマゾン創業者、宇宙飛行
- ◎ 米アフガン戦争終結

2016

2015

2014

2013

2012



- ◎ 衆院選で自公圧勝、政権奪還
- ◎ 尖閣・竹島で中国・韓国の関係悪化
- ◎ 原発一時稼働ゼロ
- ◎ 山中教授にノーベル医学生理学賞
- ◎ 中国トップに習近平氏
- ◎ 北朝鮮、弾道ミサイル2回発射
- ◎ 米大統領にオバマ氏再選
- ◎ 欧州の債務危機続く
- ◎ ミャンマー民主化進展
- ◎ アベノミクス始動
- ◎ 特定秘密保護法が成立
- ◎ 2020年夏季東京五輪決定
- ◎ 猪瀬東京都知事、辞職
- ◎ 福島第一原発、汚染水深刻に
- ◎ スリランカ容疑者、米情報収集活動を暴露
- ◎ 中国が尖閣上空に「防空識別圏」
- ◎ アルジェリアで人質事件、邦人10人犠牲に
- ◎ 解散改選で集団的自衛権承認
- ◎ 衆院選で与党圧勝
- ◎ 御嶽山が噴火、57人死亡、6人不明
- ◎ 広島で土砂災害、74人死亡
- ◎ STAP細胞論文捏造や改ざん
- ◎ イスラム国が勢力拡大
- ◎ エボラ出血熱感染拡大、死者6000人
- ◎ ノーベル平和賞にマララさん
- ◎ 米、キューバが国交正常化へ
- ◎ 安全保障関連法が成立
- ◎ 川内原発が再稼働
- ◎ 新国立競技場建設、エンブレム白紙に
- ◎ 辺野古移設、国が着工
- ◎ 世界各地でイスラム過激派アロ
- ◎ 中東難民、欧州に殺到
- ◎ ギリシャ金融危機
- ◎ 米軍、南シナ海で「航行の自由作戦」
- ◎ 安倍首相、真珠湾慰霊へ
- ◎ 参院選で改選勢力3分の2に
- ◎ 米大統領選でトランプ氏勝利
- ◎ 英国がEU離脱決定
- ◎ 世界でテロ頻発、邦人も犠牲に
- ◎ 地球温暖化対策のパリ協定発効
- ◎ 米大統領選8年ぶりキューバ訪問

Research & Report

◀ペレージャ音楽祭(イタリア)での演奏(2017年)



ピアノを通して感性を共有し、生涯の友になる音楽との未来へ導く

テクニックよりも大切な、心揺さぶる感情の表現法を伝える

音楽学部 音楽学科
田中 修二 教授 — TANAKA Shuji

国際コンクールで第3位という輝かしい成績をおさめピアニストとしての華々しい活動経歴をもつ田中修二先生。ピアノという楽器を演奏すること、指導すること、それぞれの難しさと同時に楽しさ、喜び、感動、数々の魅力を体感してきた半生。今は指導者として音楽の楽しさを伝える仕事にやりがいを感じる毎日を送る。学生を指導することの面白さ、学生への想いを熱く語っていただいた。

■演奏者から指導者へ
歩みを進めるなかで、
音楽本来の楽しさに救われた転機

「ご自身がピアノに初めて触れられたのはいつ頃ですか？」

幼稚園でオルガン教室に通い始め、小学校1年生でピアノに転向しました。将来は音楽の道へ進もうとときちんと向き合い始めたのが、高校に入る頃からです。

——京都市立芸術大学で本格的なレッスンを重ねられて、卒業と同時にデビューリサイタルをされていますよね。

お世話になった園田高弘先生が非常に熱意を持って頑張らせてくださり、京都・東京で開催させていただきました。と同時に、先生に勧められるがまま国内外のコンクールも受けるようになり、1986年には第3回日本国際音楽コンクールで3位に入賞することができて、演奏会の仕事も数多く入りました。

ところが、よし！これからという時に病気で40日間も入院することになってしまったのです。20本近い演奏会の予定をキャンセルすることになり、「今までやってきたことは何だったのか？」と虚しさを感じていた病床でFMラジオから流れてきたのが、ウィーンフィルのベートーヴェンでした。耳に届くその演奏が、なんと心地よかったですか！

自分が演奏していたものは本当に音楽だったのか？と思うほどに、そのラジオから流れる演奏に救われて僕の音楽に対する方針が一気に変わりました。音楽はもっと心から楽しんでいいもの

なのだと思えた大きな転機でしたね。

——その後、神戸女学院で指導者となられるわけですね。

京都市立芸術大学卒業後いろいろな場所に非常勤講師として勤めましたが、コンクールで3位をもらった頃、神戸



▲ウィーン(オーストリア)プライナー音楽院との交流演奏会での演奏。このホールはブラームスも演奏したことがあるという古い歴史を持つ(2018年)



女学院からも依頼をもらって教えるようになり、翌年には専任教員となり、そこから早や32年になります。あの転機がなければ、僕の指導法も大きく違っていただろうね。

■さまざまな感情を並べたパレットを使った、感性を共有する指導法

——自身で演奏されることと、指導されることの違いは感じられますか？

演奏する立場でも指導する立場でも、音楽に向かう姿勢として重要なことは基本的に同じです。それは、演奏することで音楽家たちの感性を理解し共有できることがいちばんの喜びであるところ。音楽家たちの経験や、音楽を通じて自分も体験できる世界ですから、学生には自身で共感できる回路を持たせようとしています。僕がラフマニノフを理解するのは同じように、学生たちにも音楽家の感性を共有してほしいですね。共有することは音楽本来の楽しさを理解することに繋がりますから。

本校の学生は女性ばかりですから、卒業後に結婚して育児や配偶者の仕事の都合などでピアノから遠のいてしまふ人もいます。もしピアノが弾けない状況になったとしても、この感性を共感する回路がしっかり育てられていたら、生涯を通じて音楽というものを楽しめるはずですよ。

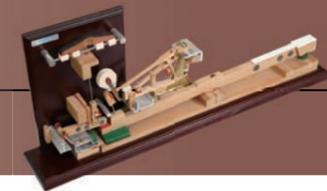
——「感性の共有」を伝える、先生独自の指導法はあるのでしょうか？

音楽というものは形が見えないもの

ですから、感性に繋がる感情表現を理解しやすく具体化するようになっています。たとえば「嬉しい」と一言で言っても、いろいろな「嬉しい」があります。お菓子を貰って「わーい」という小さな「嬉しい」と、入試に合格した「やったー！」という「嬉しい」は違いますよね。恋人が死んだと思っていたのに生きていた！みたいな状況があれば、「嬉しい」でも泣いてしまうと思いませんか？この嬉しい一つ一つを、学生たちが使っている口紅の色を並べた化粧品パレットのように並べて思い浮かべてみるのです。そして「この曲のこの部分の感情は嬉しいだけ？でも、これは泣くほどの嬉しいではないかな？さくらの「嬉しい」では？」と感情パレットで表現するかのようになり、噛み砕いて伝えます。背景にどんな物語があるかを探りながら、こういった具体的な経験や感情が連想できるように話題を提供するのです。

Discography

- 「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 / チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番」【ピアノ】田中修二【指揮】阪哲朗 日本センチュリー交響楽団
- 「ラフマニノフ：ピアノ作品集」【ピアノ】田中修二、セルゲイ・ザガツキン
- 「SHUJI TANAKA PORTRAIT」



ピアノの音が出る仕組みがわかりやすいように構造の一部を抜き出したアクションモデル

こういった指導をしていると不思議とこちら側にも学生個々のキャラクターが見えてくるので、各人で接し方も変えていきます。

僕は今、大学院で「指導法研究」という授業を担当しています。そこでいちはん大事だと伝えていることは「先入観を捨てて相手を観察せよ」ということ。個々の学生がそれぞれ何を感し、何を理解しようとしているのか？といううことは、一切の先入観を取り払ったうえで観察しないと見えてきません。教科書というのは、あつてないようなもので、学生すべてに同じ指導法ではうまくいかない。相手それぞれで指導法を変えないと、音楽というものは教えられないと思っています。

■「弾かされる」のではなく、自分の意志で「弾く」ことに喜びを見出す
——指導されるうえで難しさを感じられることはありませんか？

学生それぞれですので、それぞれ百人百様でいろんなケースがあります。しかしもっとも重視したいのは、弾かされるのではなく、自分の意志と感性で弾くことが大事だということです。特にピアノという楽器が他の楽器と決定的に違うのは、鍵盤を押せばどんな高さの音でも出るので、自分で音程をとらなくていいというところです。だからタイプライターを間違えずに打つと同じように、鍵盤を押さえる練習をしたらある程度は弾けてしまう。

しかし、それは本当の音楽ではないと思っと思っています。

ところがピアノは幼少期から習う人が多いので、「リズムはこうですよ」「大きい小さいはこうですよ」と自分の意志と関係なく技術で弾かされてきた学生が意外と多い。そうすると何が違うのか自分で探すようにといつても、なかなか答えが見つけれられないんです。けれどこの部分を無視してしまつと、自分で演奏するにしろ人を教えるにしろ、本当の音楽ではないという意味で大問題だと思います。だからこそ僕が指導できるこの4年間で、テクニク以前の感性の重要さを、きっちり時間をかけて伝えていきます。

実際に学生たちが感性で弾く重要さを理解して大きく変わってくれるのを見るのがいい。曲を聴いて一緒に泣けるような生徒を増やしていくことが理想です。ただ、指導中にこちら側が感極まって先に泣いてしまふ「先生、また泣いてる！」と学生にからかわれてしまふこともあります。(笑)

■将来、自分を誇れる一曲を選ぶことが最大のアドバンスであり応援のかたち
——4年生になるとソロリサイタルもありますね。

はい。一般観客も招く場なので、完成度の高いものを披露しなければいけないという意見もあるのですが、むしろ私はそういった選曲でなく、一生懸

士に密着するものです。音楽学部の学生なら「行った方がいい」ではなく「行かなければいけない」ではないでしょうか。

僕のミュンヘンへの留学は1年ほどでしたが得るものは多かったですし、25歳の時に京都大学のオーケストラに連れてられて初めてオーストリアやドイツで演奏会をした時も海外での公演に感慨深いものを感じ、目から鱗の経験ができたことと感動したことを覚えています。

街へ出た時には、偶然見かけた教会の丘がブルックナーの眠る場所だったことがあり、「交響曲4番の冒頭は、この景色なのか！」と感激したこともあ

りました。音楽が生まれた場所をダイレクトに肌で感じると、言葉では表しきれない何かが目覚める感覚が必ずあります。

今はコロナの影響で難しいのですが、以前は毎年イタリアのペルージャ音楽祭に学生を連れて行ったり、ウィーンのプライナー音楽院との交歓コンサートなども積極的に行っていました。早い再開を心待ちにしています。

■音楽学科で得たことを
存分に生かせる未来が待っている

——学生たちの将来については、どう思われていますか？

音楽にとつていちばん大切なのは、演奏のテクニクよりもまずは感性。自分の意志と感性をもって演奏することこそが演奏者として本当の喜びです。学生が4年間の指導でそのことを感じとつて変わっていく姿を見ることが指導者としての自分にとつてはこの上ない生きがいだと感じられます。



▲(写真左)2019年9月に兵庫県立芸術文化センター大ホールで開催された「協奏曲の夕べ」(右)卒業生を含む門下生たちと終演後に記念撮影

命に頑張れる弾きたいものを弾きなさいと言います。「弾きたい」と持つてきたどんな曲も決して却下することはありません。

なぜなら卒業後ピアノから離れてしまふ学生にとつては、これが最後のリサイタルになるというケースが多いからです。将来、自分の子供に「お母さんがピアノをやっていた証」として見せられるものがこのリサイタル映像だけになるかもしれません。たとえ下手だった失敗したとしても、「お母さんはこんなに頑張ったんだよ！」とその姿を見せられるようにと思うのです。学生たちが選んでくる楽曲は難しいものであることが多いのですが、「昔から弾いてみたかったんです」という言葉や「よし、やれ！頑張れ！」と背中を押してしまいます。

もちろん当日はこちらもヒヤヒヤしますが、学生たちが必死に弾く姿を見ていると、演奏が最後に辿り着いた瞬間こちらもグッとこみ上げるものがあるのです。4年間指導を続けた僕には、学生がそつと成長した姿を見せてくれることが生きがいだと言えますね。

■音楽が生まれた海外の地には、新たな発見や大きな学びがある
——先生もドイツへ留学されたご経験がありますが、学生の留学や海外研修についての考えをお聞かせください。
私たちが扱う音楽はほぼ外国のもので、音楽に必要な感性はそれぞれの風

最近卒業後に、ずっとピアノを弾き続ける学生もいれば、音楽とは無縁の会社へ就職していく学生も多い。けれど、演奏会のために一生懸命練習を重ねた経験、試験までに長い演奏曲を覚えたノウハウ、室内楽で培った他楽器との協調性やコミュニケーションスキル、マンツーマン指導で備えた礼儀など、すべてが社会で働くうえで、売

りになる部分も大きいはず。学生たちには信念を持って、これだけのことをやってきた、と胸を張ってほしい。頑張った記憶や経験は、社会でも存分に生かせると思います。

そしてどんな形でもいいので、身に

つけた音楽の楽しみ方を生涯心の片隅に大切に持ち続けてほしいと思います。
——先生ご自身、指導者として今後の展望などはありますか？

将来的には、年齢やスキルに関わらずいろいろな人を教えてみたいですね。音楽の捉え方も様々だと思うので、新鮮で面白そうですね。ピアノの指導を通して、まだまだ新しい音楽体験ができる可能性を信じています。



2020年に神戸女学院大学音楽館前で撮影した冬の小鳥「ジョウビタキ」。田中教授が愛用する小鳥の模様が織り込まれたネクタイ

■田中修二(たなか・しゅうじ)——京都市立芸術大学音楽学部卒業。大学卒業と同時にデビューリサイタルを開き、以後、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団他、数多くのオーケストラと共演。ドイツやハンガリー、及び日本各地にて、活発な演奏活動を行い、1986年には第3回日本国際音楽コンクールで第3位に入賞。1997年には、神戸女学院大学の派遣によりミュンヘン国立音楽大学へ留学。大阪文化祭本賞、咲くやこの花賞、大阪舞台芸術奨励賞、坂井時忠音楽賞など多数の受賞歴もある。京都市立芸術大学、県立西宮高校の非常勤講師を経て、神戸女学院大学に勤務。また開催したリサイタルがCDやBlu-rayとしてもリリースされている。日本野鳥の会会員という顔も持ち、特に「ジョウビタキ」には愛着がありトレードマークとして使用している。



K.C.Alumni

■岡本真貴子(おかもと・まきこ)
2015年3月、人間科学部 心理・行動科学科を卒業。同年4月、TAKAMI BRIDALに入社。商品管理課、セッティング課を経て、2021年より帝国ホテル 大阪 衣裳室にて、スタイリスト業務に従事する。



◆**お客様の笑顔に触れられるやりがい**
どちらかといえば人見知りでシャイな性格だと自己分析する岡本さん。最初は営業職にも自信がなかった。しかし実際にお客様と触れ合える仕事には自然と新たなやりがいも見つけられるようになった。「お客様から『ありがとう』の言葉をもらえたり、ドレスを試着する嬉しそうな笑顔を直接見られることが今のやりがいです。勧めた衣裳を気に入ってもらえたら『よし!』と思えるし、何着も何着も迷われた末に納得される1着をご提案できた時は『よかったです!』と、こちらも笑顔になります」。大学時代には対人関係心理学が専門のゼミに在籍。学んでいく中で人と色彩の関わりを深く知りたいたいと思い取得したというパーソナルカラーリストの資格も現職で役立っている。なかでも、普段明るい色は選ばないというお客様に、絶対に似合うと確信したイエローのドレスを提案して見たところ、新婦様ご本人も大変気に入ってくださり、そのドレスに決定したという経験は大きな自信に繋がった。「資格取得後も、色

彩心理学を卒業論文の題材にしたぐらい、自分には興味深い分野。今はカラードレスだけでなく、色打掛に合わせる刺繍襟や胸元に差す花嫁小物との色合わせのご提案など、より専門的なアドバイスにも生かされています。プライベートでパーソナルカラー診断をやってみようという案も出ているので今後も楽しみです」。

◆**お客様の「反応」に心ときめく毎日**
接客時に岡本さんが最も大切にしている。衣裳選びを楽しんでもらうという心構えは、先輩スタイリストから教わった。「最初は雰囲気にもまれて、皆さんどうしても緊張なさるんです。なるべく他愛もない話を投げかけリラックスしていただくことで、少しでも楽しんでもらえるよう努めています。そういう心遣いを重ねるうち、やがて来店時に『岡本さん、いますか?』と自身を訪ねてきてくださるほど打ち解けたお客様が増えたことが嬉しい笑顔をこぼす。

◆**唯一無二のスタイリストを目指して**
今後は、ドレスだけでなく和装の魅力も伝えていきたいと意気込む。「この華やかな着物1枚を仕立てるにも、糸を染める、機を織る、模様を描く……数多くの技法が凝縮されているんです。高齢な職人の方が多く、もう二度と同じものはできないと言われる貴重な打掛も揃えています。どうしてもドレスだけ選ばれてお客様が多いのですが、せっかくの機会なので、和装の魅力もしっかりとお伝えするのが今後の課題です」。

取材時、初めて自分ひとりで担当したお客様の結婚式を数週間後に控えていると教えてくれた岡本さん。「今はまだまだですが、いつかお客様から『岡本さんでよかった』『岡本さんが選んでくれたドレスでよかった』なんて一言が聞けたら、すごく嬉しいでしょうね。いつの日かその言葉をいただくことが一番の目標。まずは日々の接客のなかでいかに喜んでいただけるかを追求しながら、これからもっといろいろな勉強を重ねていきたいと思っています」。



◆**人の笑顔に携わる仕事がしたい!**
「新婦様がドレスを選ぶ時間はいちばんウキウキワクワクする時。楽しい時間をお過ごしただけのようサポートしたいです」。帝国ホテル 大阪のTAKAMI BRIDALで、今年1月からスタイリストとして働き始めた岡本さん。ホテルで式を挙げる新郎様・新婦様やご親族の衣裳を提案し、ともに選ぶのが主な仕事だ。

◆**試行錯誤しながら計画した事業を**
子供たちが喜んでくれている姿を見て、こんなふうに入社を喜ばせる仕事、人の笑顔に関わる仕事がしたいと自然に思うようになりました」。

TAKAMI BRIDALへ入社した当初は、発注や仕入れを行う商品管理課へ配属に。翌年からは京都のラボにあるセッティング課で、挙式会場へ届ける衣裳に汚れや破れがないかなどの最終チェックを行なう業務に5年間就いていた。「衣裳のメンテナンスやセッティ

◆**試行錯誤しながら計画した事業を**
子供たちが喜んでくれている姿を見て、こんなふうに入社を喜ばせる仕事、人の笑顔に関わる仕事がしたいと自然に思うようになりました」。

TAKAMI BRIDALへ入社した当初は、発注や仕入れを行う商品管理課へ配属に。翌年からは京都のラボにあるセッティング課で、挙式会場へ届ける衣裳に汚れや破れがないかなどの最終チェックを行なう業務に5年間就いていた。「衣裳のメンテナンスやセッティ

◆**試行錯誤しながら計画した事業を**
子供たちが喜んでくれている姿を見て、こんなふうに入社を喜ばせる仕事、人の笑顔に関わる仕事がしたいと自然に思うようになりました」。

TAKAMI BRIDALへ入社した当初は、発注や仕入れを行う商品管理課へ配属に。翌年からは京都のラボにあるセッティング課で、挙式会場へ届ける衣裳に汚れや破れがないかなどの最終チェックを行なう業務に5年間就いていた。「衣裳のメンテナンスやセッティ

花嫁の笑顔溢れる ドレス選びをサポート

— 晴れの日を彩る最高の1着を提案する —

●スタイリスト
岡本 真貴子 さん — OKAMOTO Makiko



人生いちばんの晴れ舞台ともいえる結婚式。その大切な1日をより華やかに演出するのがドレスや打掛だ。その衣裳選びをサポートするスタイリストとして働き始めた岡本さん。入社後6年間は裏方の仕事をしていたが、直接お客様と触れ合える新たな環境でやりがいを見つけ奮闘する毎日を送る。

人生いちばんの晴れ舞台ともいえる結婚式。その大切な1日をより華やかに演出するのがドレスや打掛だ。その衣裳選びをサポートするスタイリストとして働き始めた岡本さん。入社後6年間は裏方の仕事をしていたが、直接お客様と触れ合える新たな環境でやりがいを見つけ奮闘する毎日を送る。



ウエディングドレスを試着したお客様が、感動して涙ぐまれていたんです。そのお顔がとても綺麗で、今でも忘れられません。その時に私も、素敵なお仕事をさせてもらっているなど実感しました





プロジェクト科目 「自然環境と人間：モーリシャスの海洋汚染とボランティア活動」

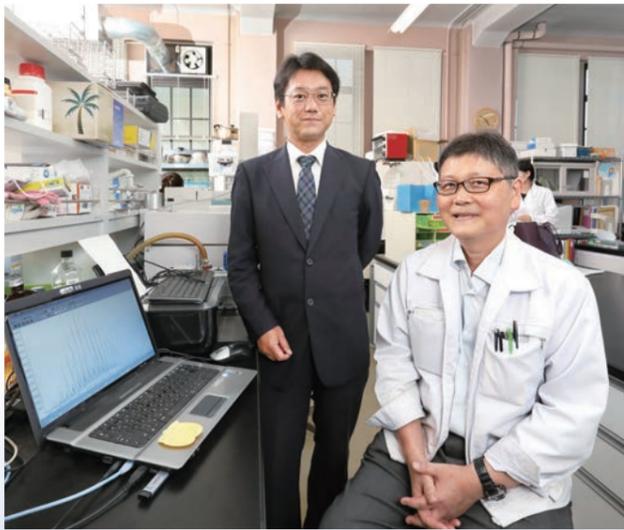
「あなたはどう思うのか？」を問う

◎多角的に考えるモーリシャス沖重油流出事故

今年度前期、プロジェクト科目「自然環境と人間：モーリシャスの海洋汚染とボランティア活動」が開講された。テーマは、2020年にモーリシャス沖で日本企業が所有する輸送船が座礁し、海洋に油が流出した事故について。国際社会に大きなショックを与えたこの出来事に今後どのように向き合っていくべきか、講義を担当した北川教授・張野教授と、受講した学生たちに話を聞く。



▲モーリシャス沖で座礁した貨物船



●文学部 総合文化学科 北川 将之 教授
●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 張野 宏也 教授

▼オンライン授業でも当事者意識を持つことはできる

授業はどのような流れで行われたのでしょうか？

北川 講義と公開セミナーという2段階の構成にしました。まず6月19日に、国際関係論専門の私が政府の対応とボランティア活動について講義。重油の海洋汚染については、水質分析を研究されている張野先生にお願いしました。

続いて7月10日のオンライン公開セミナーでは、モーリシャス在住の永井葉子様、輸送船をチャーターしていた商船三井のモーリシャス環境・社会貢献チーム(山下悟郎様)、現地調査を行ったJICA専門家(阪口法明様)にお話をうかがいました。

当初はモーリシャスでのフィールドワークを計画されていたのですが、オンラインでの開講となったことで何

か影響がありましたか？

北川 この授業のねらいのひとつは学生に当事者意識をもってもらうことだったのですが、オンラインでは難しいかもしれないと心配していました。でもゲストスピーカーの方々が非常に親身になってくださったおかげで、学生も「他人事ではない」と感じたようです。たとえばモーリシャス在住の方は、ご自宅から座礁した船を映すなど見せ方も工夫してくださっていて、画面越しであっても現地の暮らしを体験することができました。

張野 企業の方も包み隠さずお話ししてください、「学生に教えてあげよう」という思いが伝わってきましたよね。オンラインになったことで実験を見学してもらえなかったのは残念でしたが、興味のある学生には研究室で機器も見学してもらいました。

総合文化学科の北川先生、環境バイオサイエンス学科の張野先生が合同

▼多くの視点からの話を一度に聞ける贅沢

授業を振り返って、とくに印象に残っていることは？

2年生 現地の方からお聞きした、市民ボランティアのお話です。モーリシャスでは人種ごとのコミュニティがはっきり分かれているのに、重油の流出後はそうした壁を超えてすぐに協力したというお話にとても感動しました。「自分の庭が汚れたという感覚だった」と聞いて、その行動にも納得がきました。

4年生 私は「ものを購入することは投票すること」とおっしゃっていたのが印象に残っています。今回の事故の背景には安価な労働力という問題もあると知り、自分の消費行動を考え直しました。環境やSDGsに配慮された商品を選んだり、自分が納得できるものを選んでなるべく長く使ったりするなど、日本にいる私たちにもできることがあると思います。

3年生 私も、ものを買うときには責任をもった選択を心がけるようになりました。身近なところでは、フェア



●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 4年生

リードマークのあるコーヒーを買ったりしています。それから、企業の方が社会責任を果たそうとする覚悟にも感銘を受けました。真摯に取り組もうとする姿が、現地の方の心も動かしただけではないでしょう。

プロジェクト科目は総合文化学科の授業ですが、今回は複数の学科の学生が受講していました。そのことについてはどう感じましたか？

2年生 専門分野について、他学科の方と直接意見を交えた授業はこれが初めてだったので、自分では思い付かない方向からの質問や意見も多く、とても刺激を受けました。とくに先輩方は考えが深く、言葉の選び方も上手で、見習いたいと思っています。

3年生 これまで理系の授業はあまり受けてこなかったため少し心配でしたが、事前の講義でわかりやすく説明していただけたので、公開セミナーでもしっかり理解できました。またモーリシャスの事故について、国際関係の北川先生、水質分析の張野先生、現地在住の方、企業の方と、たくさんの方からお話を聞くことができたのは、とても贅沢な経



●文学部 総合文化学科 3年生

で開講されたことで、文系・理系の垣根を超えた科目になりました。その意義についてお聞かせください。

北川 ひとつの事故について社会と環境という2つの面から取り上げることにより、学生には複眼的な視点をもつことの大切さを伝えられたのではないかと思います。

張野 専門分野をもつことは重要ですが、他分野について知ることによって専門分野に対する考え方が変わるということもありますよね。同じことばかりしている、新しいアイデアは出てこない。専門性を磨かせるためにも、他分野の授業を受ける意義はあるはずですよ。

北川 本学ではプロジェクト科目以外にも、マイナープログラム制度などでも理の枠組みを超えた学びが可能なので、学生にはぜひ挑戦してほしいですね。

授業を行ううえで大切にされたことは？

北川 事前の打ち合わせで張野先生が「あなたはどう思うか？」を聞きましよう」とおっしゃったのが印象に残っています。教え込むのではなく、究極的に大切なのはそこだな。

張野 この事故に限らず、環境問題では完全な正解が出ない場合が多いんです。そうしたなかで一番大切なのが、正確なデータに基づきながら自分の頭で考えること。日本人は自己主張が苦手という問題もあるので、考えたことを自分の言葉で話す力まで育てていく必要性を感じています。



験だったと感じています。

4年生 確かにそうですね。私は4年生で、これまでできる限り多くの学科の授業を受けてきたのですが、そのなかで実感しているのは多角的な視点を獲得し、高い視座から物事を考えることの大切さ。学ぶほどに知ることや考えることが楽しくなるので、後輩のみなさんにもぜひいろいろな授業を受けてほしいです。



●文学部 総合文化学科 2年生



▲漂着した油の除去作業の様子



Online interactions

『愛神愛隣』

の精神を届けるオンライン礼拝

オンラインでの配信もはじめ、休むことなく続けられる礼拝がコロナ禍で学生たちの心の支えに

創立以来、キリスト教主義に基づく教育をすべての根幹としてきた女学院。授業の開講期間は欠かすことなく毎日の礼拝をまもり続けてきた。コロナ禍にある現状もオンラインでのオンデマンド配信を新たに始めるなど、さまざまな工夫を凝らして変わらない礼拝が続けられている。学生たちの心に届ける、本学での礼拝の大切さについて、大学チャプレンとチャプレン室職員の方にお話をお聞きした。

● **変わらぬ礼拝をオンラインでも**

「チャペルアワーは創立以来欠かさず行われています。まさに神戸女学院の建学の精神に通じる大切な時間です」と話すのは、大学チャプレンの大澤先生。

昨年から続くコロナ禍で授業の遠隔化が進むなかでも、礼拝はオンライン配信などを取り入れながら日々同じ時刻に実施している。大人数の学生参加は見合わせるかたちとなったが、「どんな日常でも、礼拝の時間を確保する」ということが、とても大事なこと」と、今まで通りの礼拝をオンラインで届けることになったのが昨年の春のことだ。

システムに負荷がかかる同時配信ではなく、録画した礼拝をオンデマンド



●大学チャプレン
文学部総合文化学科
大澤 香 准教授



●チャプレン室 職員
西岡 麻祐子 さん

で配信。ビデオカメラでの撮影や配信のための編集、コロナ禍での奨励者の調整など苦労もあった。しかし学生には自由な時間に参加できる、聞き直しできるなどの利点もあり、単純に比較はできないが、視聴者数は以前の礼拝参加者数から約2倍となった(昨年度)。

チャプレン室職員の西岡さんは「普段はなかなか足を運べなかったという学生たちも、アクセスのしやすさからオンラインでたくさん視聴してくれました」と手応えを感じた。視聴した学生や教職員からは「礼拝の時間が支えになっている」「オンラインでもオルガンの音色に癒された」という声がたくさん届いているという。

● **今後はオフラインの礼拝にも参加を**

状況の改善に応じて、対面授業に出席している学生の講堂での礼拝参加も可能である。講堂内では感染対策にも十分気を付けている。人数制限や換気のほか、礼拝前には講堂内を消毒。讃美歌の歌唱部分を短くしたり、聖書の貸出も今は中止している。「いろいろな人のお話を聞いて、みんなで讃美歌を歌う……こういう貴重な時間は学生時代ならではの時間だと思います。感染対策も行っていますので、対面授業のある日にはぜひ足を運んでほしいです」(西岡さん)。「オンラインはアクセスのしやすさや繰り返し視聴できるメリットがある反面、オフラインだからこそその讃美歌やオルガンの生の音というのは何物にも代え難いものです。通常の礼拝にくわえて、クリスマスなどの特別礼拝なども予定していますので、可能な時にはぜひ参加してほしいですね」(大澤先生)。

オンラインで見えてきた国際交流の新しいかたち

ベトナム・日越大学との共同企画で「国際共修」の第一歩を踏み出す

海外渡航が制限されているコロナ禍において「どうか学生たちに国際交流の機会を与えたい」という教員の思いから、夏季休暇中にオンラインでの国際交流サマープログラムが実現した。主催は本学の国際交流センターと、ベトナム国立日越大学・日本学専攻。学生たちが距離と言語の壁を超えてどんな体験をしたのか、担当教員である北川教授と南出准教授に話を聞いた。



●文学部 総合文化学科
北川 将之 教授



●文学部 英文学科
南出 和余 准教授

● **今回のプログラムが実現した経緯**

北川 コロナ禍で留学をはじめとした国際交流がストップしてしまっていたことから、オンラインでの異文化理解プログラムの開催に至りました。

南出 我々だけでなく、日越大学でも同じ状況だったんです。学生は日本のことを学びたくて入学したのに、留学することも留学生を受け入れることもできない。そこで、オンラインでできることを模索していたそうです。お互いのニーズがうまく合致したことから、今回のプログラムが実現しました。

● **プログラムの流れを教えてください。**

北川 学生に日本とベトナムの文化・社会について考えてもらうため、ゲストスピーカーに講義をしていただきました。それを聞いたうえで、日本とベ



トナムの学生混合グループに分かれてディスカッション。さらに2週間後には、各グループに発表してもらいました。どんな発表になるのかワクワクしつつ、心配もしていました。南出 みんな、予想以上におもしろい発表をしてくれましたよね。2週間の準備期間中、どのように過ごしているのか私たちはまったくわからなかったのですが、それぞれSNSを活用してディスカッションをしていたようです。

北川 両国ともシャイな国民性なのか、スロースタートではありましたが、お互い「知り合いになりたい」という気持ちはあるので打ち解けられたのでしようね。公共交通や災害、食事のマナーなど、さまざまな角度から日本とベトナムを比較し、分析してくれていました。

南出 半分以上のグループが映像を取り入れていたのも印象に残っています。学生たちの技術に感心しました。

北川 日本語・ベトナム語・英語のテロップを併記するなど、どの言語の話者が見ても伝わる工夫もしていましたね。

● **今回のプログラムで大切にされたことは？**

南出 言語よりも、中身に興味を持ってもらうことを重視しました。ベトナム側の教員がベトナム語と日本語の通訳もしてくれました。

北川 「神戸女学院生の英語はきれい」といわれ、高い評価を受けていますが、英語に自信がなくても国際交流はでき

るということを体感してもらえたのは大きな収穫でしたね。

南出 コロナ以前でも経済的理由や勇気がなくて留学に踏み出せなかった学生も、オンラインでならこうした国際交流プログラムに参加することができました。英語が苦手でも準備をすれば発表はできますし、それに対して海外の学生からポジティブな反応をもらうことが自信につながる。プログラム終了後もお互いに連絡を取り合ったりもしているようで、しっかり国際交流の醍醐味を味わってくれたようです。

● **来年度も継続されるのでしょうか？**

北川 その予定です。コロナ禍では留学以上に語学研修やフィールドワークといった短期の海外渡航が難しいのですが、今回のようなオンラインでの取り組みによって代替できるという手応えを感じることができました。

南出 渡航できるようにもなっていますが、事前学習のツールとして役立てられるのではないのでしょうか。事前に知り合っておけば、現地ですらに深い交流ができる可能性もあります。

北川 オンラインと実際の渡航を併用できるのが理想ですね。最近ではコロナ禍で国際プログラムが軒並み中止になっていることから、言語や文化の異なる学生がともに学ぶ「国際共修」の必要性が叫ばれています。今回のサマープログラムは国際交流センターにとって初めての国際共修の取り組みでしたが、いい第一歩を踏み出せました。

■ 学長が宝塚市長を表敬訪問



▲ 山崎晴恵宝塚市長(右)と中野敬一学長(左)

中野敬一学長が6月22日(火)、山崎晴恵宝塚市長を表敬訪問しました。

4月11日(日)に行われた選挙で初当選された山崎市長は、本学文学部総合文化学科の卒業生です。

訪問時には、市長より懐かしい学生時代のお話をお伺いするとともに、今後の宝塚市と本学との連携の可能性について話し合いがもたれました。

■ 新型コロナウイルスワクチン 学内接種を実施



▲ 接種枠提供のお礼に来られた石井西宮市長(中)と中野敬一学長(右)、佐藤友亮ヘルスサポートセンター長(左)

新型コロナウイルスの感染を最小限に抑え、集団で免疫を獲得し元の生活を取り戻すため、学生・生徒・教職員等を対象とした武田/モデルナ社製ワクチンの学内接種を8月30日(月)から行い、延べ約4,000回の接種を行いました。また、自治体の負担軽減および地域社会全体の感染拡大防止の観点から、地域の皆さまに接種枠の提供を行いました。

接種にあたっては、同窓生の医療従事者で組織する「KCメディカル」をはじめ多くの方々のご協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。



接種前の問診

■ オープン記念コンサートを開催(産学連携)



コンサートでの演奏風景

8月2日(月)、スミリンケアライブ株式会社が運営するサービス付き高齢者向け住宅「エレガーノ西宮」にて、音楽学部の学生と教員による同施設のオープン記念コンサートが開催されました。スミリンケアライブ社と本学は昨年3月に産学連携を締結しました。

本来であれば「エレガーノ西宮」がオープンした昨年5月にオープン記念コンサートを開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で延期となっていました。

当日は松浦修音楽学科准教授による指揮のもと、管楽器や打楽器を専攻する学生12名が演奏を行い、ご参加いただいたご入居者の皆様と楽しいひと時を過ごすことができました。



コンサートに出演した学生と松浦准教授

■ 音楽学部ウインドオーケストラが特別演奏会を開催



9月23日(木・祝)、エミリー・ホワイト・スミス記念講堂にて、音楽学部ウインドオーケストラがCD発売を記念して特別演奏会を開催しました。

CDは6月4日(金)に発売されましたが、読売新聞で取り上げられるなど大きな反響をいただいています。

※当日は、新型コロナの感染防止対策を万全に行った上で開催しました。